

平成 26 年度腐食防食学会 受賞者選定経過報告

表彰選考委員会
委員長 原 信義

本学会では、腐食防食の分野における学術および技術の進歩発展に顕著な貢献をした会員に対して学会賞、腐食防食の分野における学術の進歩発展に顕著な功績をあげている者を講師として、会員の知識と興味を高める権威ある講演とする岡本剛記念講演、優秀な学術論文に対して論文賞、優れた技術に対して技術賞、優秀な若手の会員に対して進歩賞、加えて本部並びに支部の事業発展に貢献した会員に対して功績賞、貢献賞を贈り表彰してきている。平成 26 年度で、学会賞は第 16 回（含む協会賞）、岡本剛記念講演は第 18 回、論文賞と技術賞は第 35 回、進歩賞は第 28 回となる。

本学会の規定に従い、表彰選考委員会内に、学会賞選考委員会（委員長 原 信義）、岡本剛記念講演（委員長 丸山俊夫）、論文賞選考委員会（委員長 野田和彦）、技術賞選考委員会（委員長 谷 純一）、進歩賞選考委員会（委員長 高橋 智）を設け、功績賞、貢献賞については総務会にて平成 25 年 10 月から平成 26 年 1 月にわたって慎重に審査を行ってきた。その結果、推薦された候補者から、学会賞 2 件、岡本剛記念講演 1 件、論文賞 1 件、技術賞 2 件、進歩賞 2 名、功績賞 4 名、貢献賞 8 名が選考された。

<学 会 賞>

表面処理材の腐食機構究明と次世代技術への展開

大 塚 俊 明（北海道大学）



大塚 俊明

【略歴】

大塚俊明君は昭和 51 年 3 月北海道大学大学院工学研究科博士課程を修了。同年 10 月ドイツ連邦共和国（当時の西ドイツ）クラウスタール工科大学腐食防食部門研究員。その後、北海道大学助手、助教授、名古屋工業大学助教授を経て、平成 10 年 4 月北海道大学教授。平成 24 年 4 月から同大学特任教授。この間、金属の不働態化ならびに不働態皮膜の研究、鉄鋼さびの研究、腐食環境にある金属表面の光学測定法の開発、腐食に関わる電気化学手法の開発、導電性高分子被覆による防食法の開発などに従事。腐食防食学会では、編集委員、研究専門委員長、北海道支部長、編集委員長、副会長、会長を歴任。平成 19 年岡本剛記念講演賞を受賞。会長時には、腐食防食協会から、現在の公益社団法人・腐食防食学会への変更を行った。

【業績】

大塚俊明君は分光装置を用いた金属不働態の解析、表面処理鋼板や長期暴露された耐候性鋼のさび層の解析とその成長機構の解明、燃料電池電極材料の酸素還元反応や高温高圧下における金属材料の応力腐食割れなどの研究に携わり、顕著な功績を挙げている。これらの知見は腐食防食工学において大きなインパクトを与えるとともに、今後の材料設計に大きな影響を及ぼしている。一方、本会においては理事 4 期、評議員 6 期、編集委員長 3 期に加え、研究専門委員長、北海道支部長等を歴任し、平成 21 年から副会長、平成 23 年から会長を歴任し、本会の公益法人化移行に際して先頭に立って推進するなど、その貢献は多大である。よって、大塚俊明君に学会賞を授与する。

<学 会 賞>

冷却水処理に関する研究開発業績と学会活動への貢献

高 崎 新 一



高崎 新一

【略歴】

高崎新一君は昭和48年3月東京理科大学大学院修士課程の後、同年4月栗田工業株式会社入社。総合研究所において、冷却水処理薬品、腐食モニタリング、原子力除染法、石油精製プロセス用薬品などの研究開発および水の基礎研究に従事。この間、昭和58年4月より1年間、北海道大学工学部工業分析化学第一講座研究生および平成3年10月より1年間、米国ジョーンズ・ホプキンス大学工学部化学工学科研究員。平成22年9月に同社を退職後、同年10月から平成26年3月まで（公財）原子力安全技術センターで廃炉における除染技術の研究開発に従事。腐食防食学会では研究事業委員会委員長、関東支部長、理事、監事、評議員、編集委員などを務める。工学博士（北海道大学）。腐食防食専門士。

【業績】

高崎新一君は冷却水処理、原子力化学除染、石油精製プロセス、地域熱供給システムなどにおける防食技術の開発に多くの成果を挙げている。特に、重化学工業における冷却水処理ではクロム酸塩に代わる無公害で節水型の防食処理として、ホスホン酸（有機リン酸）とポリマーを併用した水処理を開発した。本法は今日でも国内における冷却水処理の主流となっている。一方、本会においては、理事4期、評議員7期、監事2期に加え、研究事業委員長、関東支部長等を歴任し、学会活動へ貢献するところが大きい。よって、高崎新一君に学会賞を授与する。

岡本剛記念講演

大気腐食の評価とモニタリング技術

篠原 正（独立行政法人物質・材料研究機構）



篠原 正

【略歴】

篠原 正君は1985年3月東京大学大学院工学系研究科金蔵材料学専攻博士課程修了とともに、学位（工学博士）取得。1985年11月東京大学工学部金属材料学科助手、1988年2月東京大学工学部金属材料学科講師を経て1992年6月東京大学工学部金属工学科助教授。2002年4月独立行政法人物質・材料研究機構 材料研究所 ディレクター、2004年4月同材料基盤情報ステーション ディレクター、2006年4月同材料信頼性センター グループリーダー、2011年4月同材料信頼性評価ユニット グループリーダー、現在に至る。1992年5月、平成2001年6月および2005年5月に当学会（腐食防食協会）論文賞受賞。また、2005年3月日本鉄鋼協会 里見賞、2010年4月独立行政法人物質・材料研究機構 理事長賞を受賞。2013年より当学会会誌「材料と環境」編集委員長。

<論文賞>

NbAl₃ 金属間化合物のペスト酸化抑制に及ぼす雰囲気中の微量 NaCl 蒸気の効果

佐藤 芳幸 (秋田大学)
原 基 (秋田大学)

山下 光 (秋田大学)



佐藤 芳幸



原 基



山下 光

【略歴】

佐藤芳幸君は、昭和 63 年 3 月東北大学大学院工学研究科博士課程前期 2 年の課程金属工学専攻修了。同年 4 月藤倉電線株式会社入社。平成 3 年 11 月秋田大学鉱山学部物質工学科助手。平成 9 年 3 月博士（工学）（北海道大学）。平成 10 年 7 月秋田大学工学資源学部材料工学科助教授。平成 10 年 10 月～平成 11 年 7 月ニューサウスウェールズ大学客員研究員。平成 19 年 4 月秋田大学工学資源学部准教授。現在に至る。

山下 光君は、平成 13 年 3 月秋田大学大学院鉱山学研究科物質工学専攻修了。同年 4 月田中貴金属工業入社。現在に至る。

原 基君は、昭和 57 年 3 月東北大学大学院工学研究科博士課程後期 3 年の課程金属材料工学専攻修了。工学博士。同年 4 月秋田大学鉱山学部金属材料学科助手。昭和 63 年 4 月同講師。平成 2 年 4 月～平成 3 年 1 月マサチューセッツ工科大学客員研究員。平成 3 年 8 月秋田大学鉱山学部物質工学科助教授。平成 12 年 1 月秋田大学工学資源学部材料工学科教授。現在に至る。

【選考理由】

NbAl₃ 金属間化合物は軽量高温材料として有望であるが、耐酸化性に劣ることが懸念される材料である。著者らは雰囲気に微量の NaCl が存在すると、塩化反応とそれに引き続く再酸化反応によって Al₂O₃ 保護皮膜が形成され、耐酸化性が著しく向上することを見出した。反応性評価における熱力学的視点による精密な解析は学術的に高水準と評価され、さらに、これらの結果が Al を含む金属間化合物を軽量高温材料として実用化する上で重要な指針を与えるものとして高く評価されることから、平成 26 年度論文賞候補者として推薦する。

<技術賞①>

耐食材料及び表面処理材料の大気腐食促進試験法の開発と国際規格化

武藤 泉 (東北大学) 藤井 和美 (株式会社日立製作所)
藤田 栄 (JFE テクノリサーチ株式会社) 伊藤 叡 (新日鐵住金マテリアルズ株式会社)
梶山 浩志 (JFE スチール株式会社) 須賀 茂雄 (スガ試験機株式会社)



武藤 泉



藤田 栄



梶山 浩志



藤井 和美



伊藤 叡



須賀 茂雄

【略歴】

武藤 泉君は昭和 63 年 3 月東北大学大学院工学研究科金属工学専攻博士課程前期 2 年の課程修了。同年 4 月新日本製鐵株式会社入社，平成 10 年 3 月東北大学大学院工学研究科金属工学専攻博士課程後期 3 年の課程修了（社会人コース）。平成 15 年 10 月新日鐵住金ステンレス株式会社に転籍。平成 17 年 4 月東北大学大学院工学研究科助教授。現在，東北大学大学院工学研究科教授。

藤田 栄君は 1980 年 3 月北海道大学大学院工学研究科修士課程応用科学専攻（佐藤教男教授を修了後，日本鋼管株式会社へ入社し，技術研究所腐食化学研究室（松島 巖室長）に勤務。鋼材研究室，表面処理研究室，材料科学研究室室長，マテリアルズソリューションセンター主幹を経て，2005 年 JFE チール株式会社スチール研究所表面処理研究部長，スチール研究所主席研究員を経て，2013 年 9 月定年退職。直ちに JFE テクノリサーチ株式会社ソリューション本部（西日本）シニアフェローに勤務，現在に至る。平成 13 年 3 月大阪大学より博士（工学）を授与（柴田俊夫教授）。

梶山浩志君は平成 3 年 3 月京都大学大学院工学研究科冶金学専攻修了，同年 4 月日本鋼管株式会社に入社し，鉄鋼研究所に配属され，表面処理鋼板などの鉄鋼材料の耐食性解析や評価技術に関する研究・開発に従事。平成 15 年 4 月に JFE スチール株式会社となり，スチール研究所に配属。平成 23 年 3 月博士（工学）（東北大学）。現在に至る。

藤井和美君は昭和 63 年 3 月東京理科大学大学院理学研究科化学専攻修士過程終了。同年 4 月株式会社日立製作所に入社し，日立研究所に配属され，電子機器，家電製品，発電プラント機器などの耐食性評価および腐食防止技術に関する研究・開発に従事。平成 20 年 9 月博士（工学）。現在に至る。

伊藤 叡君は昭和 49 年 3 月九州大学大学院博士課程応用化学専攻修了。同年 4 月新日本製鐵株式会社に入社し，基礎研究所，鉄鋼研究所にて耐候性のステンレス鋼，低合金鋼などの耐食鋼開発及び構造物の電気化学的腐食診断技術の開発に従事。この過程で米国商務省 NBS（工業標準研究院，現 NIST）に留学。その後，鉄鋼研部長，フェロー・先端研所長を経て新日本製鐵株式会社退職，平成 19 年から新日鐵化学株式会社，新日鐵マテリアルズ株式会社にて事業開発担当役員。現在，新日鐵住金マテリアルズ株式会社，エンジニアリング株式会社顧問。ISO の活動歴は約 15 年。

須賀茂雄君は昭和 50 年 3 月早稲田大学理工学部大学院工業経営学科卒業，ノースカロライナ州立大学大学院及びワシントン大学卒業。昭和 50 年 4 月スガ試験機株式会社入社，平成 20 年 5 月同社代表取締役社長に就任。平成 23 年 11 月公益財団法人スガウェアリング技術振興財団専務理事。ISO/TC35（塗料）・TC38（繊維）・TC42（画像）・TC61（プラスチック）・TC79（軽金属）・TC107（表面処理）・TC156（金属腐食）各日本代表委員をはじめ，ASTM，IEC，CIE 委員として，耐候，腐食，色彩に関する研究，国際標準化活動に幅広く従事，現在に至る。

【選考理由】

本試験法は，屋内外で長期間使用される金属材料製品の耐食性を評価するための促進試験についてとりまとめたも

のである。本試験法の開発においては、実環境中の腐食因子の特徴や、実環境中で使用された部材の状態の調査結果が反映されている。そのため、従来用いられてきた塩水噴霧試験等に比べて、本試験法は実環境中で使用された部材の腐食形態を模擬できるという特徴を有している。また本試験法は2013年3月1日付でISO国際規格(ISO16539)に制定されており、今後、世界的に広く活用される見込みがある。以上の理由により、本会技術賞を授与する。

<技術賞②>

腐食防食学会規格「20%チオシアン酸アンモニウム溶液中でのPC鋼材の水素脆化試験方法」JSCE S1201の制定

高井 健一 (上智大学)	三浦 正純 (株式会社四電技術コンサルタント)
辻川 茂男 (東京大学名誉教授)	齋藤 博之 (東日本電信電話株式会社)
酒井 潤一 (早稲田大学)	溝口 茂 (高周波熱錬株式会社)
市場 幹之 (東京電力株式会社)	岡村 司 (高周波熱錬株式会社)
片岡 顕比古 (東京電力株式会社)	樽井 敏三 (新日鐵住金株式会社)
新留 祐也 (東京電力株式会社)	前川 智哉 (住友電工スチールワイヤー株式会社)
中村 英一 (北海道電力株式会社)	鴨井 智也 (神鋼鋼線工業株式会社)



高井 健一



辻川 茂男



酒井 潤一



市場 幹之



片岡 顕比古



新留 祐也



中村 英一



三浦 正純



齋藤 博之



溝口 茂



岡村 司



樽井 敏三



前川 智哉



鴨井 智也

【略歴】

高井健一君は平成2年3月早稲田大学大学院理工学研究科資源および材料工学専攻修了。同年4月日本電信電話株式会社に入社。平成8年早稲田大学博士(工学)、平成11年に上智大学理工学部講師、平成14年同助教授、平成21年同教授。金属材料中の水素存在状態解析、鉄鋼材料の水素脆化の研究に従事、現在に至る。

辻川茂男君は昭和40年東京大学工学部冶金学科を卒業、同年東京大学工学部助手、昭和42年西岡可鍛工業入社する。昭和47年東京大学工学部助手、昭和52年東京大学工学部講師、昭和55年東京大学工学部助教授、同年工学博士を東京大学より授与、昭和60年東京大学工学部教授となり、平成13年退官。その間、応力腐食割れ、大気腐食等

の腐食科学の研究に従事。平成13年東京大学名誉教授となり、平成25年腐食防食学会腐食センター長に就き、現在に至る。

酒井潤一君は1970年早稲田大学大学院理工学研究科修了。同年4月日本鋼管株式会社入社。以来、腐食・防食分野の研究開発に従事。この間、1976年より2年間、社命によりRensselaer Polytechnic Institute (USA) 留学。1999年同社退職。同年4月鋼管計測株式会社入社。2000年3月同社退職。同年4月早稲田大学教授嘱任。2003年各務記念材料技術研究所兼任。2007年理工学術院本属。1995年博士(工学)(東京大学)を授与される。現在に至る。

市場幹之君は昭和61年早稲田大学大学院資源および金属工学専攻修了。同年日本鋼管株式会社に入社。研究所で高合金の耐食性研究、表面処理の研究開発に従事。平成13年日本原子力研究機構にて腐食計測技術の研究に従事。平成16年から東京電力株式会社技術開発研究所(現 技術統括部)にて電力設備の腐食防食の研究開発に従事し、現在に至る。

片岡顕比古君は平成19年3月横浜国立大学大学院物理情報工学専攻終了。同年4月東京電力株式会社に入社し、神奈川支店に配属され配電設備の保守保全に従事する。平成23年10月より技術開発研究所に配属され、配電設備腐食劣化に関する研究に従事。平成25年7月より技術統括部に配属され、現在に至る。

新留祐也君は平成14年3月横浜国立大学大学院電子情報工学科修了。同年4月東京電力株式会社入社。平成20年7月技術開発研究所材料技術センター材料横断技術グループに配属され、配電機材の腐食劣化に関する研究に従事する。平成23年10月配電部配電技術グループにて配電支持物の開発に従事し、現在に至る。

中村英一君は昭和59年3月日本工学院北海道専門学校電気工学科修了。同年4月北海道電力株式会社に入社し、小樽支店配電課に配属され、配電線の保守、設計に従事する。平成25年4月から札幌北支店配電課に配属され、現在に至る。

三浦正純君は1980年3月北海道大学大学院工学研究科合成化学工学専攻修了。同年4月に四電エンジニアリング株式会社に入社。1982年4月株式会社四電技術コンサルタントに転籍、発電プラントの腐食関連業務に従事。その後、コンクリートや鋼材(特に耐候性鋼)など建設材料の劣化調査・診断に関する業務に従事。1997年博士(工学)。

齋藤博之君は平成元年3月早稲田大学大学院理工学研究科資源及び材料工学専攻修士課程修了。同年4月日本電信電話株式会社に入社し、通信設備用材料の環境劣化に関する研究開発に従事。平成11年博士(工学)早稲田大学。平成25年技術士登録(金属部門)。平成20年より同社環境エネルギー研究所にて、高強度鋼材の遅れ破壊の研究に従事。平成24年より金沢大学客員准教授、平成25年より東京電機大学非常勤講師をそれぞれ兼務。現在に至る。

溝口 茂君は1977年3月九州大学工学部鉄鋼冶金学科卒業。同年4月高周波熱錬株式会社入社、製品事業部製造部平塚工場に配属。以来、PC鋼棒などの高強度鋼棒、ばね用鋼線などの線材開発と品質管理業務に従事する。高強度鋼材に関する種々の特性の調査、特に耐遅れ破壊性の試験調査・研究を行ってきた。

岡村 司君は平成8年3月九州大学大学院工学研究科材料物性工学専攻修了。同年4月高周波熱錬株式会社に入社し製品事業部製造部に配属され、主に高強度線材製品の開発・品質保証に従事。平成22年製品事業部開発企画部に配属され、新商品の開発に従事、現在に至る。

樽井敏三君は昭和56年3月北海道大学大学院工学研究科金属工学専攻修了。同年4月新日本製鐵株式会社に入社し、線材・棒鋼の高強度-高延性化に関する研究開発に従事。平成24年新日鐵住金株式会社。平成25年日鉄住金テクノロジーズ株式会社。平成22年東京工業大学博士(工学)、現在に至る。

前川智哉君は平成12年3月豊橋技術科学大学大学院生産システム工学専攻修了。同年4月に住友電気工業株式会社に入社し特殊線事業部製鋼圧延部に配属され、主としてばね用鋼の介在物制御に関する技術開発に従事。平成15年より住友電工スチールワイヤー株式会社PC技術部に配属され、PC鋼より線の開発などに従事する。平成23年より住友電気工業株式会社アドバンストマテリアル研究所金属材料研究部に配属され、現在に至る。

鴨井智也君は平成6年3月大阪府立大学工学部金属工学科修了。同年4月神鋼鋼線工業株式会社に入社し、技術部に配属され、PC鋼材の設計・技術開発に従事。平成7年より製造部に配属され、鋼線の生産・品質管理に従事。平成15年10月より技術部に配属。現在に至る。

【選考理由】

本規格は、橋梁、通信、電力などの産業分野で広く使用されているプレストレストコンクリート用鋼材(PC鋼材)の水素脆化試験法について規定したものである。本規格の原型となったFIP試験は、試験手順が明確に規定されていなかったために、試験機関によるデータ相違や大きな試験誤差が生じることが課題とされていた。このため、本学会に設置した委員会が実施したラウンドロビン試験を含む膨大な実験結果に基づいて、試験溶液の調製や温度管理などの試験手順について検討し、本規格としてとりまとめた。本規格の制定により、PC鋼材のよりの確かな水素脆化特性評価が可能となったため、本会技術賞を授与する。

<進歩賞①>

構成イオンの流れの発散による酸化被膜中のボイド生成の定量的予測に関する研究

上田 光敏 (東京工業大学)



上田 光敏

【略歴】

上田光敏君は平成11年3月東京工業大学工学部金属工学科卒業。平成13年3月同大学大学院理工学研究科材料工学専攻修士課程修了。平成16年3月同大学大学院理工学研究科材料工学専攻博士課程修了，博士（工学）（東京工業大学）。同年4月より東京工業大学大学院理工学研究科材料工学専攻助手，平成19年4月同専攻助教。平成22年3月よりアーヘン工科大学にて1年間の研究滞在（助教在職中）。平成25年7月同専攻准教授，現在に至る。

【選考理由】

上田光敏君は，耐熱鋼の高温水蒸気酸化や酸化皮膜内部におけるボイド生成の定量的予測に関する研究に取り組み，酸化皮膜中の構成イオンの流れの発散に着目し，これまで不可能であった酸化皮膜内部におけるボイド生成の定量的解析に成功した。この手法は極めて独創的かつ斬新であり，同氏は今後の高温酸化・腐食の分野を担う人材として大いに期待される。

これらの業績は，進歩賞を授与するに相応なものと判断し，進歩賞選考委員の全員一致で，ここに推薦する。

<進歩賞②>

Fe-Cr合金の活性溶解速度の組成依存性に関する研究

長澤 慎 (新日鐵住金株式会社)



長澤 慎

【略歴】

長澤 慎君は平成13年東京理科大学理工学部光学化学科卒業。平成15年同大学大学院理工学研究科工業化学専攻修士課程修了。同年4月新日本製鐵株式会社に入社。平成24年10月より新日鐵住金株式会社となり，現在に至る。

【選考理由】

長澤 慎君は，Fe-Cr合金の活性溶解速度の組成依存性に関する一連の研究を通じて，工学的観点から腐食速度発現の主要因が金属活性溶解反応に関する活性化エネルギーに帰属することを見出した。活性化エネルギーを分離し，根本的性質である化学的寄与分のみを抽出する手法は画期的であり，合金の活性溶解の組成依存性を究明する上で有効であり，学術的貢献度が非常に大きい。

これらの業績は，進歩賞を授与するに相応なものと判断し，進歩賞選考委員の全員一致で，ここに推薦する。

<功績賞>



内田 仁

【略歴】

内田 仁君は昭和 47 年 3 月室蘭工業大学大学院工学研究科修士課程を修了。同年 4 月姫路工業大学助手，昭和 61 年 10 月同助教授。この間，大阪大学より工学博士を授与，英国 Leeds 大学へ在外研究員として 1 年間出張。平成 8 年 4 月姫路工業大学教授，県立 3 大学統合により平成 16 年 4 月兵庫県立大学大学院教授。工学研究科評議員，工学部学生部長，学生副部長兼総合教育センター副センター長，工学研究科長兼工学部長，学長特別補佐（研究開発担当）を兼務して平成 25 年 3 月定年退職。同年 4 月より兵庫県立大学名誉教授・特任教授，兵庫県立但馬技術大学校長として現在に至る。設計工学，環境材料学，表面改質等の分野において，一貫して機械や構造物の安全・信頼性設計に関する研究に従事。腐食防食学会では，理事，評議員，関西支部長，進歩賞選考委員長などを歴任。



内山 休男

【略歴】

内山休男君は昭和 46 年 3 月京都大学工学部金属加工学科を卒業。同年 4 月同大学院工学研究科入学，昭和 47 年 4 月長崎大学助手，助教授を経て，平成 11 年 4 月長崎大学教授。この間，米国ペンシルバニア州立大学・英国リーズ大学客員研究員，東京工業大学客員教授，九州大学・福岡工業大学非常勤講師などを務める。鉄鋼の溶融亜鉛めっきおよびアルミニウム拡散被覆における基板金属と被覆金属との反応，被覆鋼の腐食挙動に及ぼす機械加工の影響，Zn-Al 合金の腐食挙動の解明などに関する研究に従事。金属材料，炭素系材料および超硬合金の高温酸化挙動の解明ならびに耐酸化性炭素系材料，耐酸化性超硬合金の開発に従事，現在に至る。腐食防食学会では九州支部長，評議員，理事，講演大会実行委員長などを歴任。社会貢献活動として腐食防食技術普及会を九州支部主催で開催。



大塚 俊明

【略歴】

大塚俊明君は昭和 51 年 3 月北海道大学大学院工学研究科博士課程を修了。同年 10 月ドイツ連邦共和国（当時の西ドイツ）クラウスタール工科大学腐食防食部門研究員。その後，北海道大学助手，助教授，名古屋工業大学助教授を経て，平成 10 年 4 月北海道大学教授。平成 24 年 4 月から同大学特任教授。この間，金属の不動態化ならびに不動態皮膜の研究，鉄鋼さびの研究，腐食環境にある金属表面の光学測定法の開発，腐食に関わる電気化学手法の開発，導電性高分子被覆による防食法の開発などに従事。腐食防食学会では，編集委員，研究専門委員長，北海道支部長，編集委員長，副会長，会長を歴任。平成 19 年岡本剛記念講演賞を受賞。会長時には，腐食防食協会から，現在の公益社団法人・腐食防食学会への変更を行った。



西村 六郎

【略歴】

西村六郎君は昭和 51 年北海道大学大学院工学研究科博士課程単位修得退学。同年北海道大学工学部助手，昭和 53 年 10 月通産省工業技術院中国工業技術試験所，平成 6 年 4 月大阪府立大学助教授，平成 17 年 4 月大阪府立大学教授，平成 25 年 3 月退官（名誉教授）。この間，米国マサチューセッツ工科大学博士研究員，広島大学非常勤講師，東北大学金属材料研究所客員助教授を務める。鉄の不動態皮膜，材料の孔食現象，種々の元素でイオン注入された純ニッケルの水素透過，材料の環境誘起割れ等の研究ならびに二国間（日本-インドネシア）の共同研究に従事。腐食防食学会では，副会長，理事，評議員，監事，編集委員などを歴任。平成 21 岡本剛記念講演賞を受賞。

<貢献賞>



高島 敏行



荒井 実



小向 茂



馬飼野 信一



川辺 允志



中森 正治



坂本 俊治



本山 賢二

【略歴】

高島敏行君は1970年4月に北海道工業大学に技手として採用され、1975年同助手、その後1992年12月に北海道大学から博士（工学）を授与される。1993年同講師、1997年同助教授、2001年同教授、2009年からは北海道工業大学の経営母体である北海道尚志学園の評議委員、2011年4月から北海道工業大学の副学長に就任、現在に至る。専門は材料工学で蒸気拡散法によるセラミックスと金属の反応過程と層成長、セラミックスと金属の接合メカニズム。腐食防食学会では、北海道支部長、評議委員、理事を歴任。

荒井 実君は、1970年東海大学化学工学科を卒業し、同年4月に日本防蝕工業株式会社に入社、以降、腐食防食の研究や電気防食工事に従事、主に地中埋設管の維持管理に関する計測技術の開発や電気防食用電極材料の研究を担当、現在に至る。1990年金属部門の技術士を取得、当学会活動は理事、技術委員を歴任、電気防食小委員会ではISO関連に関わり現在に至る。

小向 茂君は1970年八戸工業高等専門学校工業化学科を卒業し、同年4月東京ガス株式会社に入社、1978年から技術研究所で、材料損傷解析、腐食防食に関する研究に従事し現在に至る。主に、工場設備材料、都市ガス消費機器材料、ガス導管材料の腐食防食と耐久性評価研究に従事。2009年3月早稲田大学大学院理工学研究科後期博士課程修了、博士（工学）。腐食防食学会では理事、評議員を歴任。

馬飼野信一君は1974早稲田大学理工学部応用化学科を卒業、同年5月神奈川県工業試験所入所、神奈川県産業技術総合研究所（機構改革）を経て、さらに名称変更した神奈川県産業技術センターに勤務。2009年同所長、2011年同退職。同年神奈川県顧問、2012年公益財団法人神奈川科学技術アカデミー専務理事、現在に至る。1988年工学博士。専門は電気化学計測。主として腐食・防食、リチウムイオン電池、有機系太陽電池にかかわる研究および技術支援に従事。腐食防食学会では関東支部幹事、庶務理事を歴任。

川辺允志君は1956年大阪大学工学部応用化学科を卒業し、関西電力株式会社に入社。以降、火力発電設備の腐食、防食、汚れ、防汚の実務と研究に従事。銅合金復水器管の防食に鉄注入を開始、分極抵抗に基づく鉄注入制御等防食と防汚との両立化支援、40シリーズのモデルコンデンサ研究、電気防食の防食電位制御の提議、Mnに富む付着物による異常潰食原因解明、大型付着生物対策の超低濃度塩素処理評価、銅合金防食皮膜としての生物皮膜の評価、スポンジボール洗浄の史的考察、超臨界圧プラントの水質管理の確立、化洗時期浄判定手順作成、燃焼ガスによる低温腐

食・防食研究に従事。1986年栗田工業株式会社に移籍,その後,栗田エンジニアリングの非常勤顧問として現在に至る。

中森正治君は1968年大阪工業大学工学部応用化学科卒業。1970年三菱重工業株式会社高砂研究所入社し,ボイラ,ガスタービンの高温腐食とその防食に従事。1991年技術士(金属部門),1993年工学博士(北海道大学),2000年-2004年大阪富士工業株式会社勤務。2003年腐食防食専門士,2004年株式会社高温腐食・防食テクノサーチを創設し,現在に至る。この間,2009年-2012年北海道大学客員教授。

坂本俊治君は1982年金沢大学大学院工学研究科工業化学専攻修士課程を修了。同年,新日本製鐵株式会社(現新日鐵住金株式会社)に入社。技術開発本部八幡技術研究部において主に油井管腐食の研究,高耐食油井管の開発,自動車用ステンレス鋼板の開発に従事。2002年九州大学大学院工学研究科材料工学専攻博士課程修了,博士(工学)。2013年日鉄住金テクノロジー株式会社に移籍。金属材料の破損診断解析,材料評価に関する業務に従事。

本山賢二君は1979年北九州工業高等専門学校機械工学科を卒業。同年4月に九電産業株式会社環境部に入社。以降,主に発電プラントの腐食関連業務に従事。その後プラント管理・診断,水質に起因する酸化鉄除去等の調査・研究に関わり現在に至る。